第91回　川崎医学会講演会抄録

平成14年7月31日

Chlamydia pneumoniae 感染と動脈硬化症

小児科2　尾　内　一　信

近年どちらかというと生活習慣病と捉えられ感染症とは最も縁がないと考えられる動脈硬化症と，呼吸器感染症の起因菌である *Chlamydia pneumoniae* との関連が注目されている．この両者の関連については世界中で精力的に研究されている．今回の講演では両者の関連について一部われわれの成績を交えながら，今までに分かったことや今後の研究課題や問題点について概説したい．

自己免疫性水疱症と遺伝性角化症

皮膚科　藤　本　　亘

天疱瘡は組織学的には表皮ケラチノサイトが離解する「棘融解」が特徴である．天疱瘡患者血中にはケラチノサイトのデスモゾームに存在する細胞接着分子デスモグレインに対する自己抗体が存在する．腫瘍随伴性天疱瘡は1990年に提唱された疾患であり，臨床的には難治性の口腔粘膜びらんとリンパ系腫瘍の合併を特徴とする．病理組織学的には液状変性や苔癬様の細胞浸潤がめだつため診断は必ずしも容易でない．エンボプラキン，ペリプラキンなどプラキンファミリーに対する自己抗体が検出されるのが特徴であるが，これらの分子は細胞内に局在するため，自己抗体が発症にどのようにかかわっているか不明な点が多い．ケラチン病のひとつで Blaschko 線に沿って列序性表皮母斑が多発し，組織学的に表皮の顆粒変性を認める例では，ケラチン10の変異は母斑部の細胞に検出し，血液 DNA に検出できないが，児に水疱型先天性魚鱗癬様紅皮症をみることがあり，接合後突然変異によるモザイクと考えられている．